

●東金探索(たんさく)Map●-①

■東金市に隠された徳川家康、天海大僧正のカラクリを探る！■

慶長19年(1614年)の大坂冬の陣を前に、徳川家康にとって、江戸湾の入り口で水軍を擁する大名・里見氏は、大阪へ向かう前の大きな気がかりであったようです。

そこで、鷹狩り好きの家康は、鷹狩りの際の宿泊施設という名目で、1613年から翌年にかけて、東金代官嶋田次右兵衛尉重次伊栢に「東金御殿」(現在、東金高校)を造営させました。

これは、里見氏の館山から見て「鬼門」の方角にあたり、その後「転封(てんぽう/国替。実質的には改易)」される里見氏に圧力をかける狙いがあったと言われています。

また、当時の上総(千葉県中央部)は、日蓮宗の寺院が強大化しており、日蓮宗を嫌った家康が、その動静を探るためであった、とも言われています。

東金御殿の前には、その形が鶴に似ている「八鶴湖」があります。家康が信奉した北極星を祭る「北辰信仰」では、北斗七星も「辰(シン/タツ)」と見なされ、水の神の龍神の気を宿す池として重要視していました。

その八鶴湖の北西には、「日吉神社」がありますが、そこへ続く切り通しは、四神のひとつで、江戸の東を守る「青龍」が

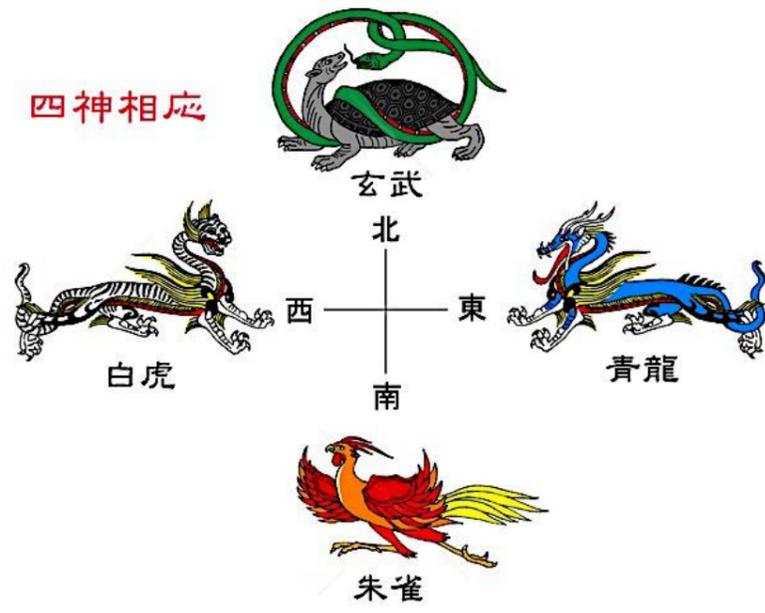
駆け上ったかのような様相を呈しています。

また、また、家康と言えば、大陰陽師である天海大僧正。「東金御殿」の造営、里見氏や日蓮宗への睨み、を考えた街の設計を施しているはずで

「東金御殿」の鬼門方向にはその鬼門除けとして、古山王神社と最福寺が配されています。

これは、江戸の寛永寺や神田明神と同じ「陰陽五行」の思想に基づくものです。

皆さんも是非、東金に隠されたカラクリを探ってみて下さい。



※詳しくは、●東金探索(たんさく)Map●-②をご覧ください。



徳川家康



天海大僧正

東金鳥瞰図

(昭和2年12月 松井天山氏写生)



※「東金鳥瞰図」の二次利用は固く禁じます。



板倉勝重



板倉重昌



板倉重矩

東金の領主：

板倉勝重は京都所司代であった。寛永元年4月29日(1624年6月14日)没。

板倉重昌は、その次男。島原の乱鎮圧にあたった。寛永15年1月1日(1638年2月14日)没。

重昌の息子・重矩は、老中や京都所司代を務め、寛文11年(1671年)幕府より上総山辺郡(千葉県東金市)の上宿・谷・岩崎・新宿(=辺田方村ともいう)・田間・豊成の二又地区を拝領(この地は後に陸奥福島藩の領地として明治の廃藩置県まで福島藩・板倉主家が治めた)。

この「京都所司代」であった板倉家が領主を務めた流れ、徳川家康お手植え蜜柑などの流れから、関東では珍しい東金市での柑橘系の京風お菓子、京都の街づくりを思わせる街の構図へと繋がっていったのではないかと説もある。

出典：Wikipedia